

暮らしにもっとヘテロな構造を



長田義仁

(独)理化学研究所
[352-0198] 和光市広沢2-1
客員主管研究員, 理学博士, Ph. D
専門は高分子科学 (高分子ゲルの物理化学).
osadayoshi@riken.jp
www.riken.jp/nano-med.eng.lab/home.html

日本ほど料理番組が多い国はないという。なるほどテレビのチャンネル回してみれば、日がな趣向凝らした料理番組が目白押し、芸術作品と見紛うような日本料理から始まって、中華料理、西洋料理それも国をこえて地域別に、さらにエスニック料理そしてそれらのミクスチュアと際限がない。考えてみれば、外国料理をあたかも自国の料理のように取り込み、なんの身構えることなしに日常的に食している国は日本をおいてほかにないのではないだろうか？ 食に限らず日本という国は衣、住、文化など外国の良いところを見事に使い分けし、日ごろの生活を国際化、というよりも多様化しヘテロ化することに成功している。これは日本文化を特徴づけている一側面であり日本人のすぐれた適応力の例としてよく引き合いに出されることである。

翻って、我が国の社会や組織についての国際化、多様化はどうだろうか？ 残念ながら、この点に関しては不思議なほど進んでいない。本欄立ち上げの趣旨であり、学会の仲間たちが日々努力されている男女共同参画を取り上げて、大学における女性教員比率は、相変わらず数パーセントでしかないし、大学の国際化も叫ばれて久しいが、外国人教員比率もまた数パーセントでしかない。役所などからの予算措置というお土産付きをもってしてもこの現実である。大学の流動化についても自校出身の教員、大学院生が過半であってあまり進んだようには見えない。一方で社会の活性化・効率化のためと称して「選択と集中」政策は着々と進行し、全国の大学・研究機関の序列化と研究分野の拠点化が進んでいる。なるほどこれは社会全体としてみれば、多様化、ヘテロ化の一つかもしれない。しかしここで問題になるのは、組織の序列化が固定化されてしまい、しかも日本の場合すべての学術領域において同一の順序になっていて、分野による順序の違い、すなわち組織の個性や特徴が見えないことである。加えて上位組織間はさておき上位と中下位組織との間で

の交流や行き来が人事を含め少ない。組織の固定化は差別化と紙一重であるばかりでなく、価値観の等質化、人材の固定化をもたらし、本来のねらいとは逆に社会の停滞、国力の低下を招く恐れがないだろうか。外国人はもとより、多彩な経歴、異質な学歴をもつさまざまな老若男女と一緒に多様なヘテロなシステムを作って活動することは、社会の活性化をもたらすだけでなく、我々自身の文化をあらためて客観視する良い機会になる。

社会や組織ということに限らず、こと研究に関しての多様化で言えば、異文化交流・異分野融合がすぐ頭に浮かぶ。これは彼我の違いを認識し、より広く自分の立ち位置を相対化できるので、自身の研究だけでなく、若い研究者を育成する上でもきわめて大切であろう。いうまでもなく、これは個人の問題ではあるけれど。

個人の問題についてさらに言えば、ひとりひとりの生活の中に仕事以外のさまざまな生活リズムを取り入れ、もっと多様な生活スタイルと価値観をもつ必要があるのではないだろうか？ 忘れられない思い出がある。いつだったか研究から離れてしばらく休暇を楽しんだ後、久しぶりに聞いた講演が何と新鮮で感動的だったことか。講演(ソナタ形式で言えば主題)から我ながら不思議なくらい次々と新たな研究構想が湧いてきて(変奏)、その構想・空想の世界はさらに発展し組み直され(展開)、結局、筆者の大事な研究課題となって後に実を結んでくれた(終結部とコーダ)。これは研究を進める上で想像すること、空想することがいかに重要かを示すものであり、それを生み出すのに日ごろの多様な生活リズムが大切であることを教えてくれている。仕事に集中しようとするほど、文学に浸るとか、音楽・絵画を楽しむとかスポーツに興じるとかして多様な生活スタイルをつくりあげることが大切であり、それがより広い視野と多様な価値観をもたらす、豊かで偏見のない社会を作る糧になるのではないだろうか？